

図8-21 類似人柄Ⅱ群;まじめな子

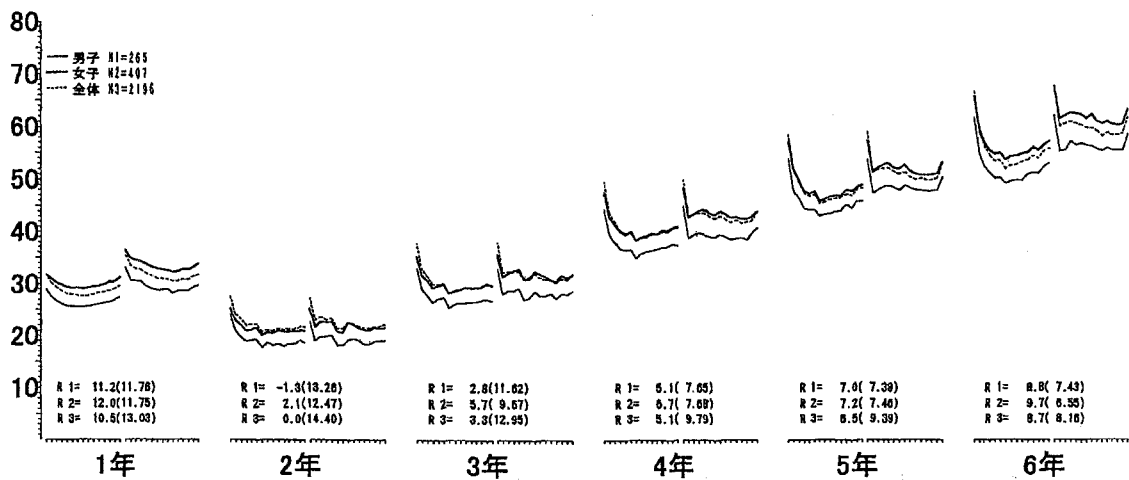


図8-22 類似人柄Ⅱ群;まじめな子

なる組織体では潤滑油の働きをする。教師にとっては得難い存在である。

この群の出現率順位は3位、678人・24.5%であった。図8-11の最下欄からの2曲線・1おだやか型と3-2なごやか型の間に全平均曲線が位置する。したがって、おだやか型以外の3型は全平均よりも心的エネルギー水準の高いことが高適応を示す一因と考えてよい。この群の4類型はいずれも前後期ともに第1行目の作業量水準が高い。これは意志発動の速さを示し、適応のよさに連動する。4類型はまた、曲線の動き幅が狭い点で共通し、

むらのない安定性を保っている。先生方が評価するすなおなよい子たちは、高適応・高健康の曲線経過に投影され、順調な作業量増と休効増を示しながら発達する。4型をまとめた精神健康度判定の結果も、全学年を通じて高度：45～50%、中度：32～38%、低度 13～22%であり、どの学年においても、高>中>低度の関係が成立していた。

ii 群：まじめな子：図8-21,22

- 3-1d じっくり型
- 5 しっかり型
- 10 きっちり型

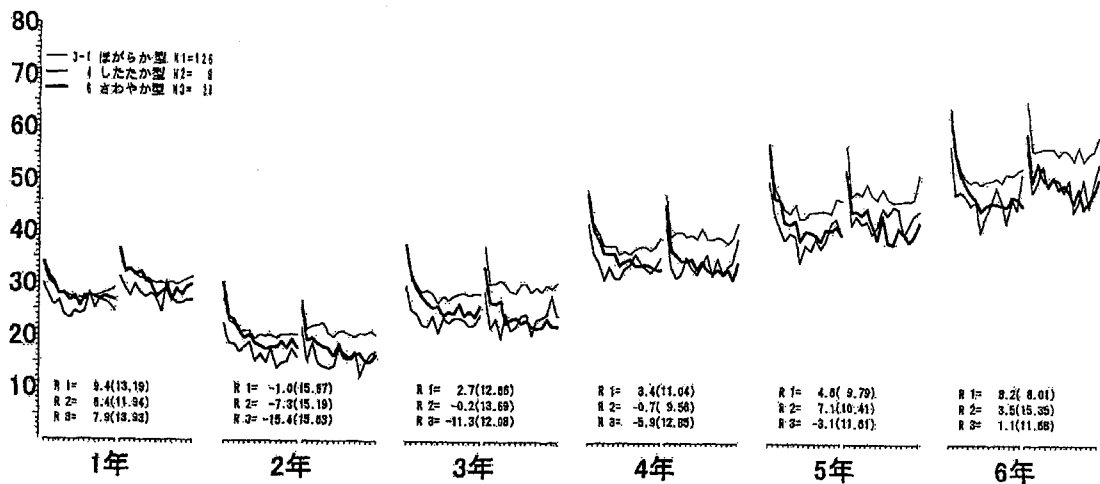


図8-31 類似人柄Ⅲ群;げんきな子

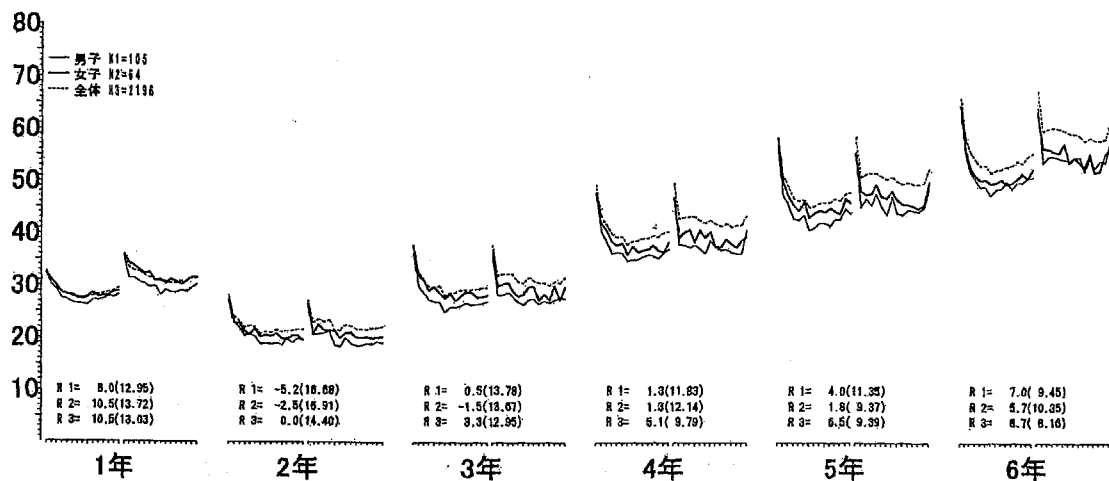


図8-32 類似人柄Ⅲ群;げんきな子

とりつきが遅く呑み込みがわるい面もあるが、得心して事に当たると粘り強くやり通す「まじめな頑張りやさん」たち。すなおな子の持ち味である適応のよさは後退するが、道義心強く責任感旺盛なしっかりもの。決めたことはきっちり守りいい加減は嫌いな子。動き出したら苦勞を厭わず、じっくりやり通す子。UK 基準から見ると3類型は異なる個性であるが、先生方の目には見分けがつかず、まじめな子として括られていた。5と10は根からのまじめ人間、3-1dはスロースターター振りが同類に見える因であろう。

この群の出現率順位は2位、822人・29.6%であった。1年次の曲線は3型とも、ほぼ同一の作業量水準と作業経過を示し、弁別がつかない。2年次は、3-1dじっくり型が最下欄に位置し、他の2型に比べて適応が遅い、3年次に3類型の後期が明確に分かれ、以後は5しっかり型が最上位に安定した後期中高曲線、中間に、学年進行とともに作業量差が開いて平坦傾向を示す10きっちり型、最下欄に徐々に作業量差の開く3-1d曲線が並ぶ。一口にまじめな子といっても、学校生活への適応は5しっかり型が中学年以後に順調に発達

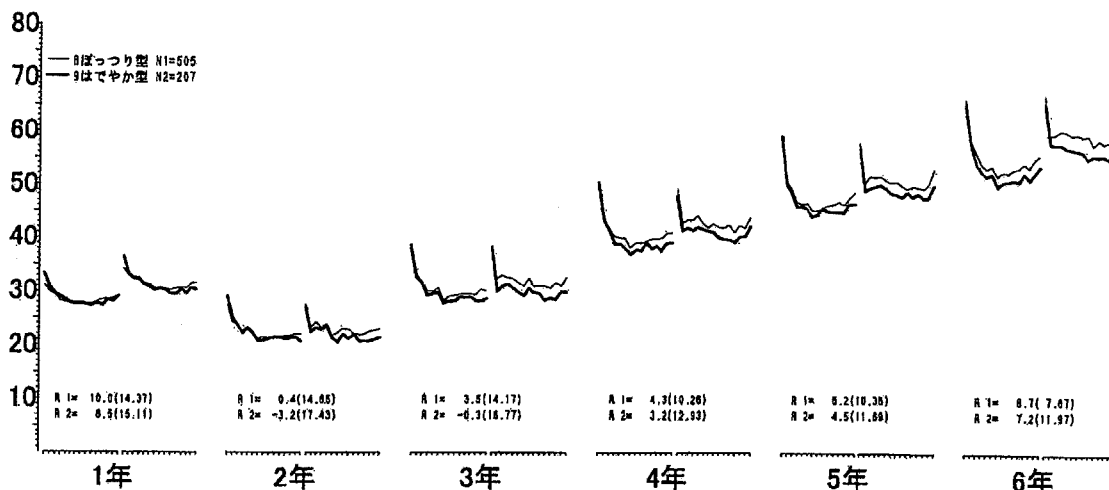


図8-41 類似人柄IV群;とっぴな子

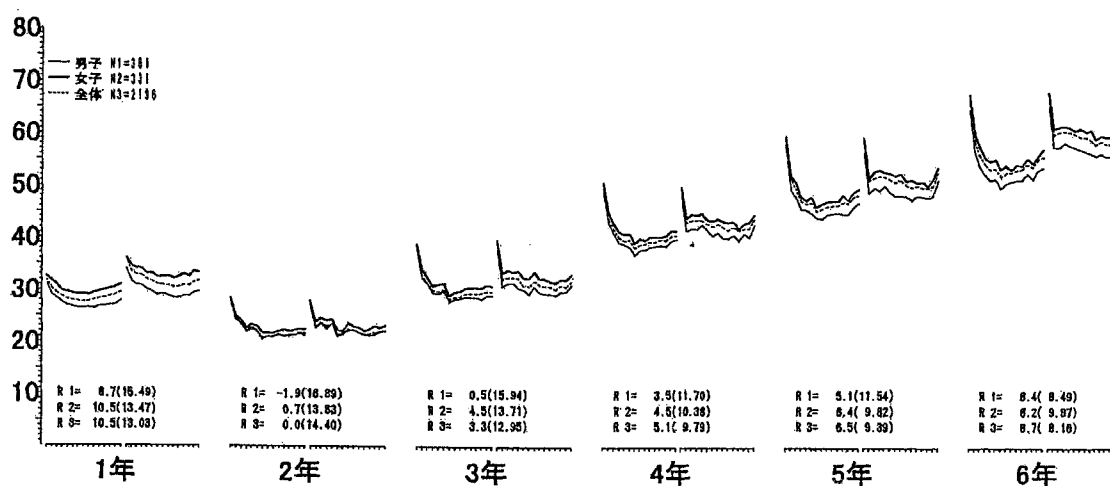


図8-42 類似人柄IV群;とっぴな子

するのに対して、きっちり型は適応の固さがついて廻るため、しっかり型の高さに達しない。3-1dは Depression が邪魔して適応が遅れると思ってよい。全平均曲線は 10 きっちり型と並行し、5 しっかり型が上位、3-1d じっくり型が下位の関係はこの点でも変わらなかった。まじめな子全体の健康度判定は全学年を通じて、高度：39～48%、中度：37～46%、低度：15～21%であり、すなおな子の I 群に続いて健康度水準が高い。しかし、1・6 年次に高>中>低度の出現率差が確認された以外は、3 年次に中>高度の逆転が見られるよう

に、I 群の高水準には及ばなかった。

iii 群：げん気な子：図 8-31,32

3-1 ほがらか型

4 したたか型

6 さわやか型

子どもは風の子、元気な子というが、中でもエネルギーで威勢のよい、馬力のある子たち。大阪では「ごんた」や「いちびり」が該当する。健康度の高い 3-1 や 4・6 が揃うとクラスに活気が湧く。坐学の知的学習だけでは飽き足らず、動き回るので不健康になると手がかかる。本人たち

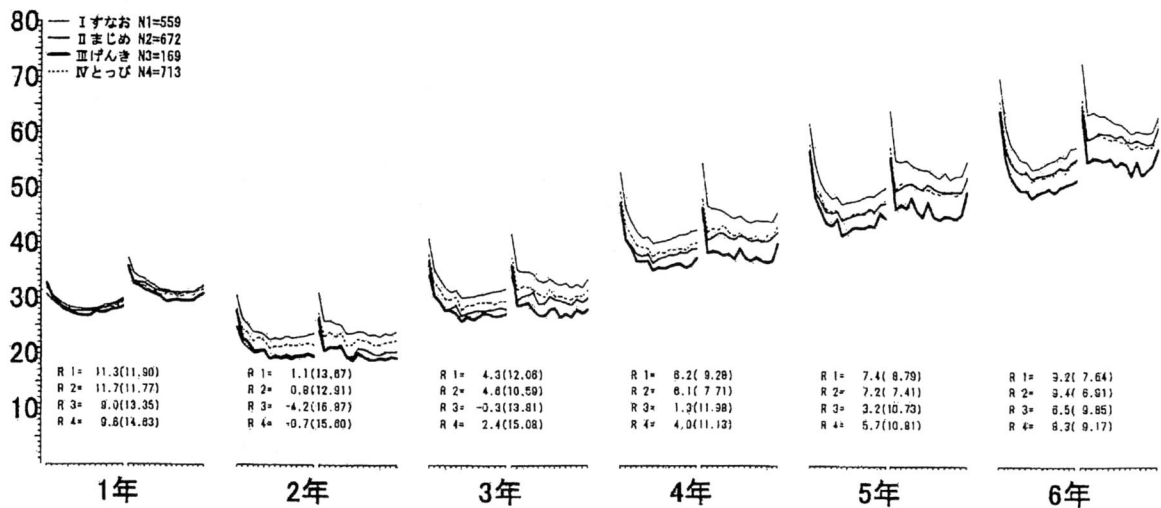


図8-51 類似人柄群4分類

はじっとしているのが苦手なので、活動性を理解して貰えない学校は辛抱のいる場所となる。

この群の出現率順位は最下位の4位、211人・7.6%。他の3群が3~4人に1人の割合を占めるのに比べて明らかに少数派である。1年次は、4したたか型を除けば全平均曲線と同水準にあるが、2年次以後は全ての曲線が全平均の下位に位置する。低いなりに作業量が増し、休効が高くなっていくところに教育効果を見てとることができる。しかし、精神健康度判定は、全学年を通じて高度：19~31%、中度：25~43%、低度：26~50%であった。しかも、1年次こそ中>高≒低度の出現率を示すが、2年次以後は低>高≒中の水準に低迷し、4・5年次の低度判定はほぼ半数に達していた。身体を張った実際的な活動場面で力を発揮する子たちが不適応感を募らせている。それが4・5年次にエスカレートする理由は、心的エネルギー水準の低さにあるのではなく、進学プレッシャーを受けて活動性が発揮できない学年だったからではなかろうか。この群が少数派である理由も地域に元気な子が少ないからではなく、自ら元気人間である親の教育観や「ごんた」を敬遠する教育環境の影響が考えられる。

iv群：とっぴな子：図8-41,42

- 8 ぼっつり型
- 9 はでやか型

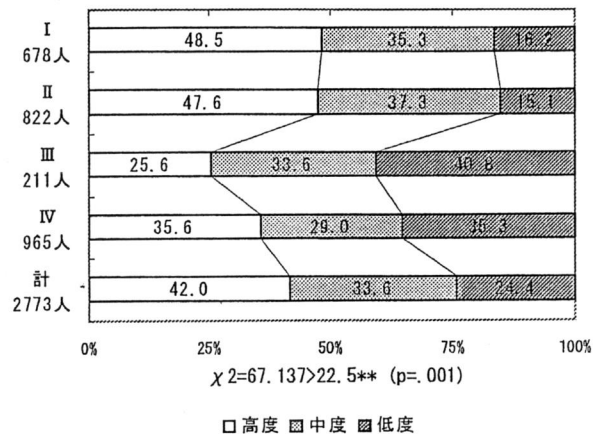


図8-52 類似人柄群×精神健康度出現率：%

突飛という表現は後から付けた名である。先生方は、単刀直入「変な子、変わった子、困った子」と述べる。すなおな子の対極に位置し、指導しにくく指導成果の上がない子たちの総称として使われていた。社会通念から外れた自分勝手な言動を繰り返す、集団から浮いたり外れる姿は困ったことに違いない。しかし、独自の感性、独創性、よい意味での個人主義、合理精神が開花したときは目を見張るものがある。

この群の出現率順位は第1位、965人・34.8%。全平均曲線は、8ぼっつり型と並行するので、9はでやか型は2年次以後、一貫して低目を経過し、1おだやか型よりもやや上、III群げんきな子たちよりも明らかに上位にあった。しかし、とっぴな

子全体の健康度判定は、全学年を通じて高度：26～36%、中度：27～34%、低度：31～47%の範囲にあり、少数派Ⅲ群に続いて低かった。その年次推移を見ると、入学当初に認められなかった健康度3群間差・高：中：低度=35：34：31%が、2年次以後は一貫して低度群が多くなり、6年次には中度群よりも高および低度群が多い二極化現象を示した（高：中：低度=36：29：36%）。個性的生き方が附小の現実に適応して、自己流が承認された子は高度へ、そうでなかった子は低度へ移った結果であろう。高度と低度が相殺されたためであろう。平均曲線は学年進行に伴って作業量と休効の漸増が認められ、ここにも自然発達と教育効果を見てとることができる。

v 類似人柄 4 群比較：図 8-51,52

類似した人柄類型とはいえ、UK 論から見れば個性の相違があり、個別指導の際には個々の人柄類型がもつ特質を理解して個別の対応をする必要がある。それでもなお類似人柄群として捉えることが意味をもつ場面は、集団指導の効率を考える場合である。

図 8-51 は該当人柄型を込みにして群別平均曲線の発達経緯を比較したものである。細線で示した適応のよい素直な子・Ⅰ群は他群に抜きんでて作業量が多く、第1行目が突出し、休効も高目である。これは心的エネルギー水準が高く、適応よく、精神的健康水準が高いことを意味する。一方太線のエネルギーッシュで元気な子・Ⅲ群は最下位に位置し、相対的に高適応を示しているとはいえない。知的学習優先の環境にあって活動的な子が低調さを示す点は、もともと少数派である点も含めて一考を要しよう。真面目な努力家・Ⅱ群が中間に位置するのは可としても、変わった子・困った子あつかいされながら突飛な子・Ⅳ群が対等以上の発達経過を示す姿は驚きに値する。これは、Ⅳ群が不健康時には手がかかっても、好きなことに熱中して個性の輝くときには高い評価を得るので、両極が相殺されて平均的経過を示したものと見てよい。結果的に健康度判定3分類比較（図 8-52）では、真面目な子と素直な子に高度判定が多く、突飛な子と元気な子に低度が多かった。健常

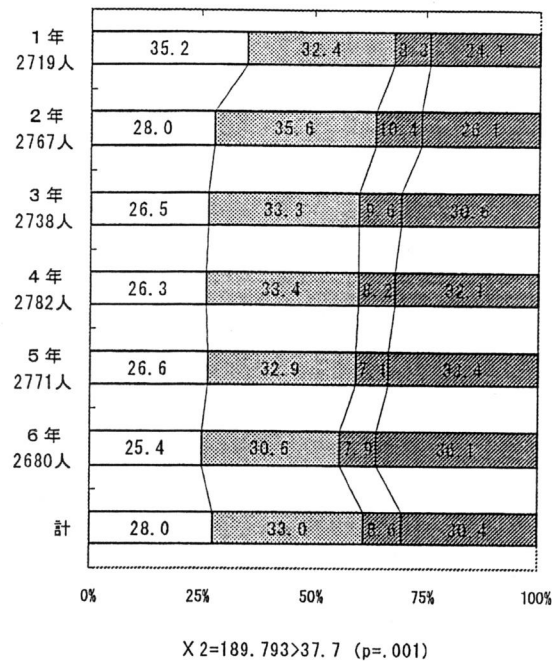


図8-61 学年別類似人柄群別分布

者常態平均曲線への接近を含めてどの群も学年進行と並行して心的機能が発達する中で、教師の観察基準である個性4群間に発達差の認められた意義は大きい。

vi 人柄類型判定結果の人柄群別年次推移

各年次基準別人柄群別分布は次の通りである（図 8-61）。各年次の第一判定を基に人柄群別出

- 6年次：Ⅳ>Ⅱ>Ⅰ>Ⅲ
- 5年次：Ⅳ≒Ⅱ>Ⅰ>Ⅲ
- 4年次：Ⅱ≒Ⅳ>Ⅰ>Ⅲ
- 3年次：Ⅱ≒Ⅳ>Ⅰ>Ⅲ
- 2年次：Ⅱ>Ⅰ≒Ⅳ>Ⅲ
- 1年次：Ⅰ≒Ⅱ>Ⅳ>Ⅲ

現率を見ると、⊗法による1年次と最終判定である6年次では大きな違いがある。6年間の変動によって確認された3-4循環型の増加とⅣ群以外の減少が顕著であるが、とくにⅣ群とⅠ群の出現率が逆転している点が目立つ。⊗法によるⅠ群判定の中から8-2が分化するであろうし、Ⅱ群の10粘着型の中から8-2が、3-1dじっくり型と5地道粘り型から8-3自閉型が分化することも考えられる。児童用加算法に変更した2年次では⊗法よりも作業量が低いために類型判定が難しい。しかし、学年進行に伴う作業量増と並行してⅣ群判定が増

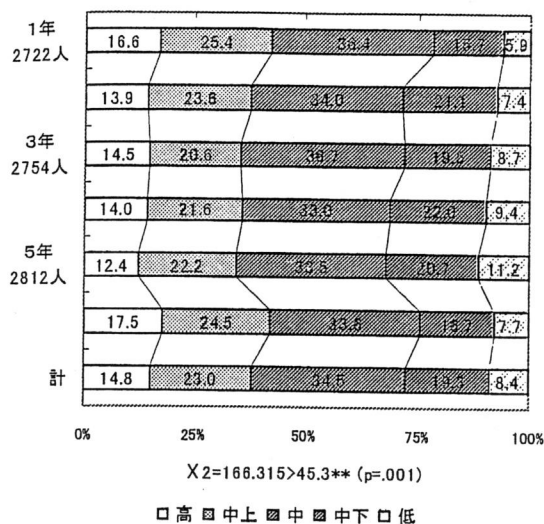


図8-62 学年別精神健康度出現率：%

え後述する健康度の低下が著しい5年次にIV群判定がトップにたち、6年次に他群との差が確定する。6年次には⊗法の1年次を除けば、健康度3段階比較では最も高度群が多く低度群が少ないので、その中での人柄判定における群別出現率の順位差は信頼度が高いと考えてよい。対象校では個性派IV群を筆頭に堅実派II群が続き協調的なI群と合わせて90%近くを占める。そもそも実際の活動派III群は少ない集団である。⊗法の判定では安易にI・II群の人柄型判定をせずにIV群を見分ける努力が要求され、児童用UK用紙に切り替えた2年次にはI群とIV群の弁別力を、3年次以降はII群とIV群の見分けに注意を払う必要がある。

4) 判定基準年次別精神健康度特徴

i UK法における精神健康度の考え方

UK理論の中で、精神的健康の考え方は人柄類型と対をなす鍵概念である。「人柄型不変・精神健康度可変」仮説は、古典的類型説が唱える遺伝的要因を人柄型の中に認めるとともに、学習や環境要因によって変化し得る側面を精神健康度として捉えた。しかし、前者は「曲線の種類だけ人間の種類がある」と仮定して曲線型の弁別を進めた後で、親子曲線から類推した仮説である。後者は「一つとして同一の曲線はない」事実を押さえた上で曲線変化論の検討が進み、行動特徴の健～不健と曲線との対応から導き出された。理論的には人柄型は体質や気質と結びついて生涯不変である。精

神健康度は環境の影響を受けるから健～不健の間を如何様にも変動する。児童期は発達要因の影響

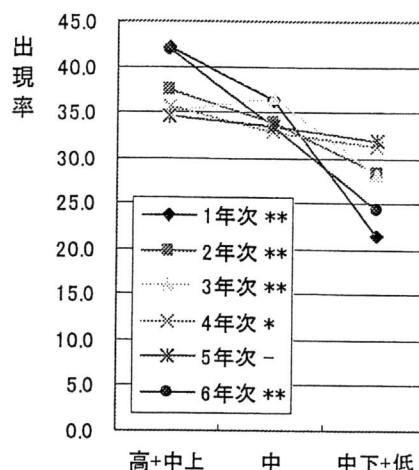


図8-71 年次別精神健康度の出現率推移：%

が大きいので、低学年から高学年まで、高度から低度まで多様な変化例が認められた。しかし、極端な変動を示す子がいる一方で、安定した健康水準を維持する子もいた。成人と違って児童用の判定基準は確立されたものはないので、毎年の判定会では各学年の作業量段階と後期増加率および曲線傾向に注目し、学年別発達の全体傾向を捉えた上で成人用の判定基準に当てはめた。

精神的に健康な姿とは「自ら楽しく生き、その生き方を四囲の人が認め、喜んでくれる状態」である。本人が楽しくても四囲が迷惑するようなら不健康であり、四囲が歓迎しても本人が得心しなければ健康とはいえない。人柄類型によって健・不健の姿は異なるが、高度の子は持ち味を発揮して生き生きと生活し、低度の子は本人が苦悩するか、四囲が困る行動を起こしやすい。

ii 対象校における精神健康度上の問題

基本的には、精神健康度は中度群を中心に高度から低度まで正規分布するのが一般的である。その点対象校では中下および低度群が少なく、高・中上度が多い(図8-62)。ただし、その傾向は⊗法の1年次と児童用用紙を最初に用いた2年次および最終6年次の3学年のみである。3・4年次は健康度3分類における高度群が減り、5年次に至っては低度群が増えて3分類間の出現率差がなくなってしまった(図8-71)。

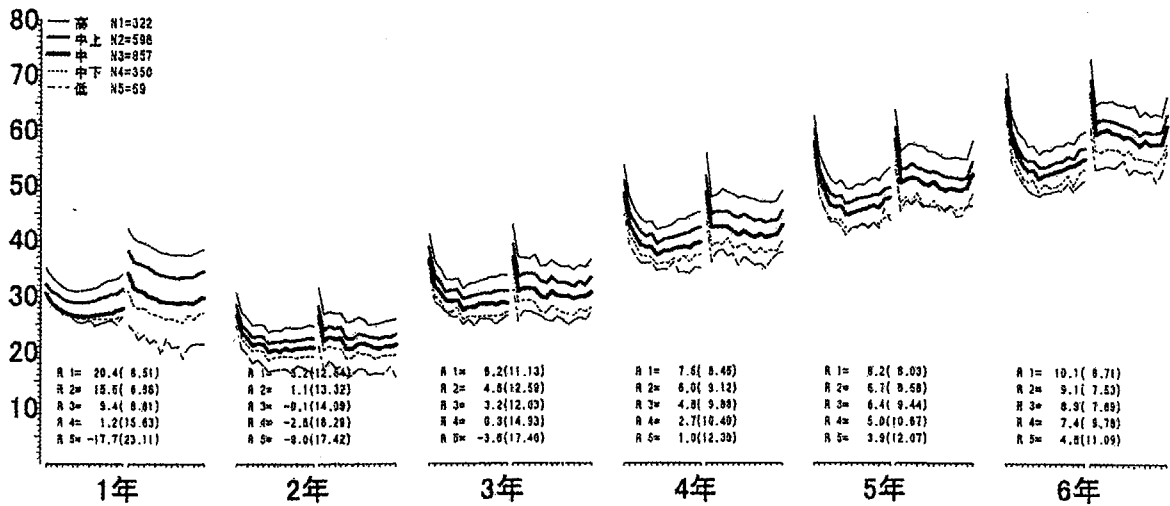


図9-1 1年次基準の平均曲線

本小学校では、成績順位の下から 1/3 の児童が中学校へ進学できない現実がある。近年では、上位者の中で私学の進学校に転出する例もあるが、大方は、小から中および中から高への進学に際して外部から成績優秀者が入学するため、小中高を一貫して附属で通す子は 1/3 になる。小学校 5 年次は、クラス担任制から教科担任制へ切り換わると同時に、保護者の関心が中学校への進学に移り、いわゆる進学プレッシャーが児童の上のしかかる。判定開始当初はとくにその傾向が強く、UK 結果の健康度判定に投影され、情緒不安定（動揺曲線）、意欲減退（下降曲線）、過緊張萎縮（平坦曲線）、自己ペースからの逸脱（行飛びおよび誤答多発）などの症状が 5 年次に集中して認められた。典型的には、下校と同時に週 10 ヶ所の塾通いの子が不健康曲線を示す例があった。近年では、進学プレッシャーが徐々に低学年まで広がりつつあり、高度群の減少と低度群の増加が 5 年次へ向けて顕著になっている。6 年次は多くの子が進学問題に見通しを持った後なので高度群が増加して、低度群が減少することになる。

図 9-1 から 6 は、判定年次の健康度 5 分類に該当する子が、他学年でどのような状態にあるかを見たものである。基準年次の高度から低度での平均曲線が、作業量と後期増加率を中心に最もよく弁別される。判定制度の高さが証明されるととも

に、健康度可変仮説、過去と未来の状態を把握することが十分に可能である点を見ていきたい。

iii 判定年次基準による平均曲線経過

i) 1 年次基準の精神健康度 5 段階別曲線特徴：図 9-1

⊗法による 1 年次の健康度 5 段階別判定該当者の平均曲線を左端に示した。5 群の平均曲線は、作業量水準と後期増加率および曲線経過に明らかな違いがある。高度群は作業量水準が最も高く、後期増加率は 20% 台に達し、前期の上昇傾向を伴う彎曲とともに高能率・高健康で意欲的な姿を象徴している。これは連続加算法を用いた 2 年次以後にも常に維持される。しかし、5 段階判定の弁別力は 4 年次までであり、5 年次は中下度と低度群の曲線が重なる。6 年次になると再度、3・4 年次と同水準の 5 段階区分が認められるが、健康度水準が下がるにつれて作業量と後期増加率が低下し、下降傾向が顕著である。心的エネルギー水準が低く、気力と根気に欠け、他者依存の姿を示している。精神健康度は可変的であるが、健康度の高い子は高い水準で安定し、低い子は低い水準で経過していることが分かる。しかし、図の下欄に示した後期増加率のように、低学年で極端な負値を示す低度群にしても、作業量増と健常者常態平均曲線への接近とともに正值に転じ、成長の足跡を見てとることができる。1 年次の⊗法による判

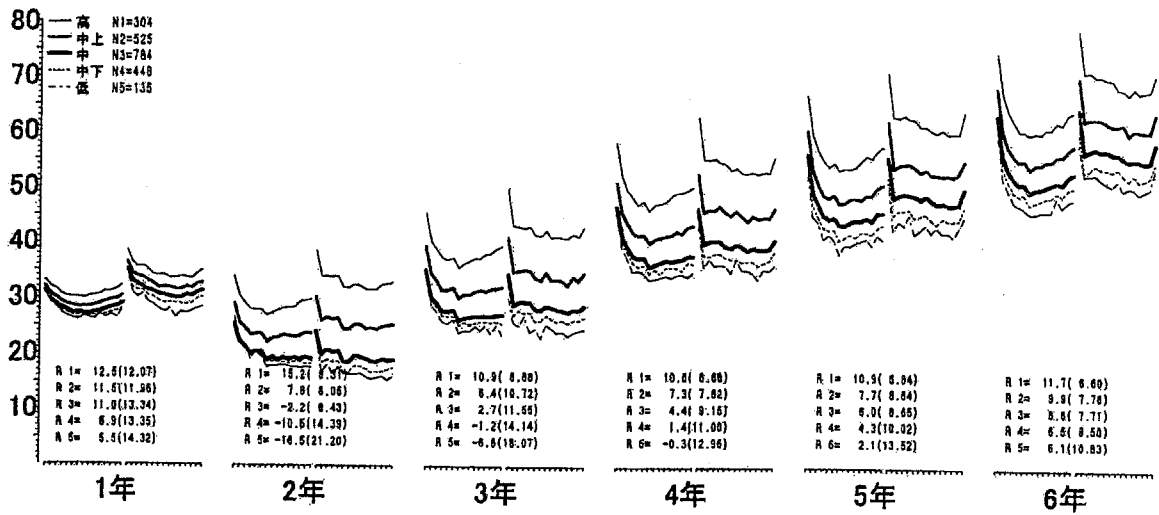


図9-2 2年次基準の平均曲線

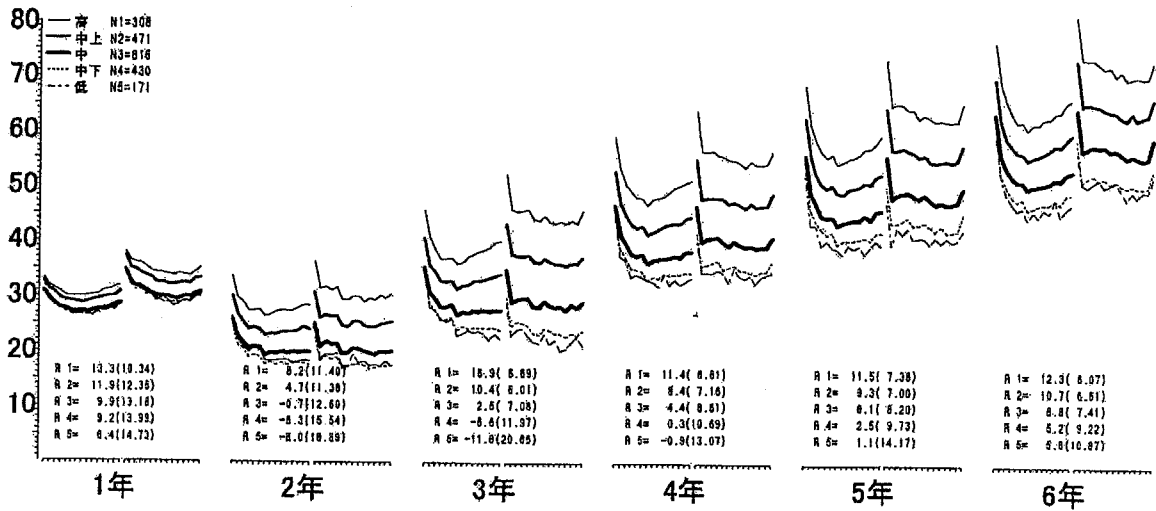


図9-3 3年次基準の平均曲線

定結果が以後の健康度水準を高い確率で予測するものである。

ii) 2年次基準の曲線経過：図9-2

⊗法から児童用連続加算法に切り換えた、2年次の健康度判定に基づく曲線比較が下図である。加算の答えが1桁になる方法は成人の加算法よりも負荷が軽い。といっても2年次ではまだ負担の多い作業であり、発達の遅い子の作業量水準は低く、判定は難しくなる。高度から中度までの3段階の曲線は明らかに差があるが、続く中下度と低度群の差は僅かである。しかし、上級学年での差違ばかりでなく、⊗法の1年次においても5段階

区分の結果は明確に示されており、2年次における健康度判定の有効性を証明するものである。

iii) 3年次基準の曲線経過：図9-3

他学年と比べて3年次基準の5段階判定では、中下度と低度群の弁別力が乏しい。破線と一点鎖線は全学年次で大差ない作業量水準にあり、中度群から離れて同じような下降傾向を辿っている。しかし、実際の個人曲線では低度群の情緒不安定が明らかであり、曲線動揺が大きい。平均曲線化すると見分けがつかないが、後期増加率と併記した標準偏差(SD)の大きさが、それを示している。低度群の人数は中度群の半数にも満たないので平

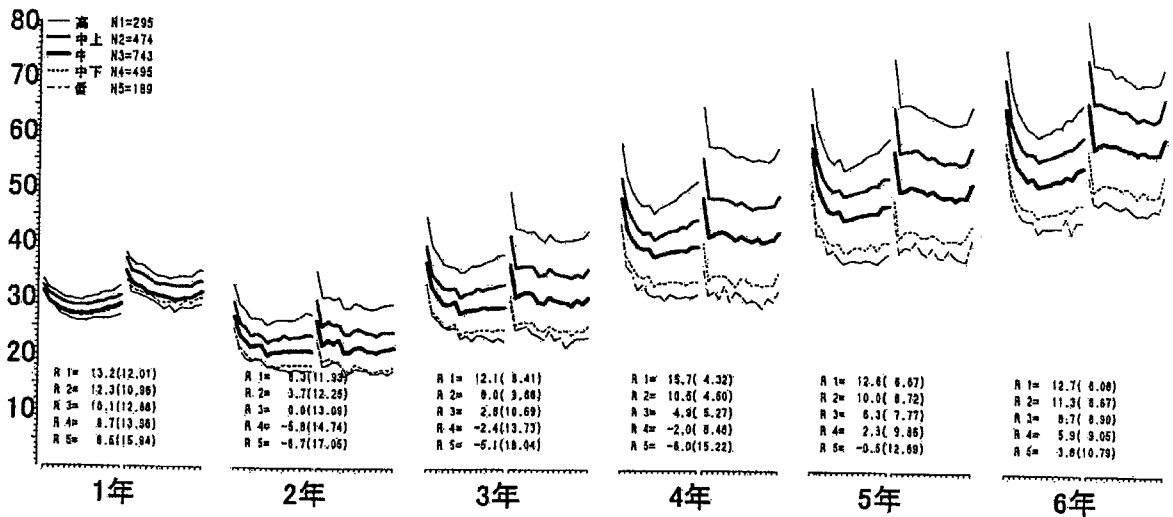


図9-4 4年次基準の平均曲線

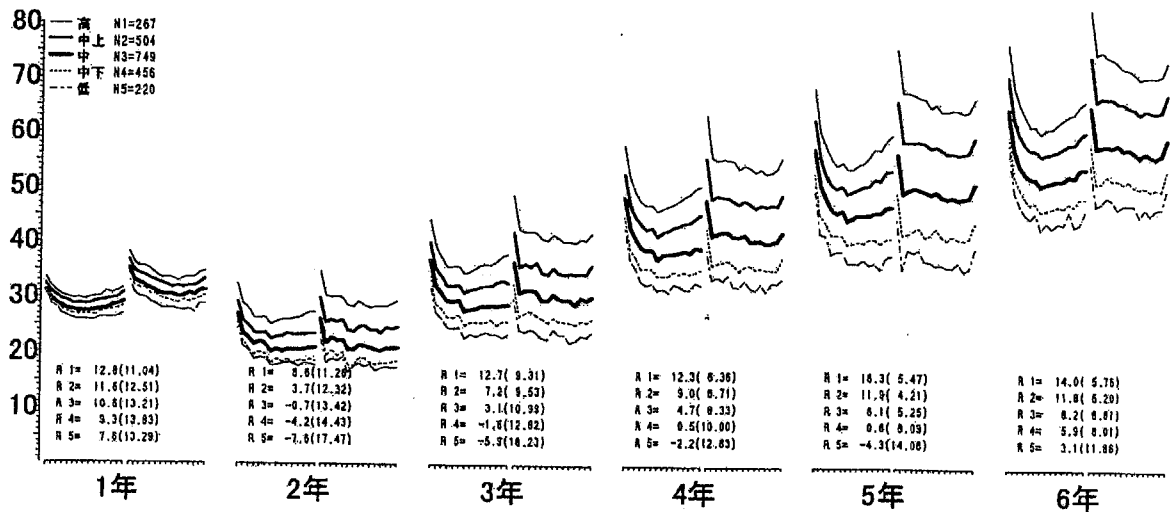


図9-5 5年次基準の平均曲線

均曲線の動きが大きく見えても仕方がないが、作業量が少ないなりに情意の安定した子は、曲線の動き幅が小さくなるのが一般的である。健康度が下がるにつれて作業量が少なくなるにもかかわらずSDの大きい点は情緒不安定を示す確かな指標である。学年進行とともにSDが小さくなることも健全な発達の証しとなる。

iv) 4年次基準の曲線経過：図9-4

どの年次の平均曲線を見ても、基準年次の5区分が視覚的に最も弁別力がある。高度群から順に作業量水準が異なり、後期増加率が低く、SDが大きくなる。初頭努力（1行目の突出）と終末努

力（後期最終行の増量）は、健康度段階に関係なく認められるが、曲線経過を見ると高度群の前期前半からの上昇勾配が最も強く、低度群へ向かうにつれて弱まり下降傾向が明確になる。4年次基準に基づく健康度別平均曲線の経過を5・6年次と比較すると、ほぼ同一であるのに対して、3年次より低学年では中下度と低度の曲線が重なり、数値で示した後期増加率とそのSDを確かめないと差が分からない。各基準年次の健康度低度群の後期増加率を比べると、3年次までは2桁の負値を示すのに対して、4年次以後は1桁となって減少する。1年次の⊗法は別基準で考えなければな

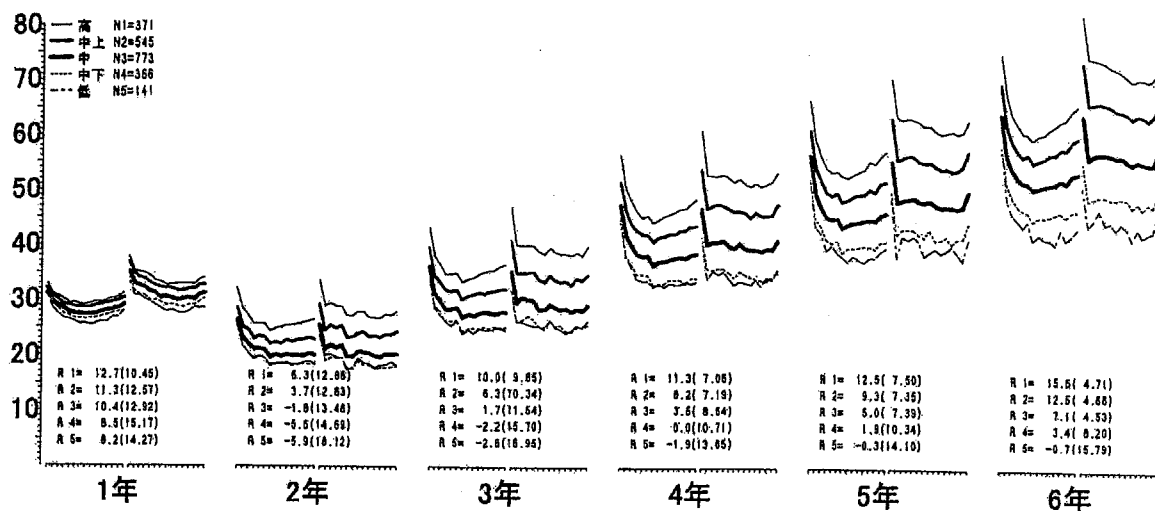


図9-6 6年次基準の平均曲線

らないが、基準年次から高学年に進むにつれて正値へ転ずるのも、児童期の精神発達と教育の影響を把える一つの視点を提供するものである。

v) 5年次基準の曲線経過：図9-5

進学プレッシャーの影響を受けた健康度の低下現象は5年次に最も強く現れるが、5年次基準の平均曲線は、健康度判定の基となる作業量と後期増加率、SD、曲線傾向などが示す諸特徴を鮮明に投影している。と同時に、2年次の中下度と低度群の接近を除けば、どの学年もほぼ同質の曲線傾向を示しており、この学年次の健康度水準が特別な意味をもつことを示すものであろう。プレッシャーを受ける場面こそ個人がもつ精神的健康の意味が問われるのではないか。健康度の高い子はプレッシャーを受ける事態にも高適応を示し、不健康な子はプレッシャーの影響をもらって不適応を起こす。そのような健・不健は、プレッシャーを受ける前に子どもが示した健康度水準と相関が高いために、平均曲線上の分化が進んだのであ

ろう。プレッシャーに対して高健康者が高適応を示し、低健康者が不適応を示すものならば、常に健康な生活を心がけ精神的健康を高める教育を尊重したいものである。

vi) 6年次基準の曲線経過：図9-6

5年次の進学プレッシャーから開放された6年次は、相対的に精神的健康水準が高くなる。その中であって、希望する進学の見通しが立たない子は意欲減退や情緒不安定に陥ったりする。6年次基準で示された低度群と中下度群に該当者が多いが、5年次以前は両曲線が重なるばかりでなく、低学年に逆上るにつれて後期増加率とSDが接近する。しかも、各学年次基準の数値と比べて極端な値はとらず、5年次以前にとくに不健康であったわけではないことを示している。6年次に示される歴然とした曲線差が低度群と中下度群に関しては進学志向の環境下での不適応から生じる心理として理解されよう。